SUCCESSION　of　WITCHES LOVE　?～迷えしフクロウ～

中之譲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＵＣＣＥＳＳＩＯＮ　ｏｆ　ＷＩＴＣＨＥＳ　ＬＯＶＥ　？
～迷えしフクロウ～

【Ｎコード】
Ｎ３９８３Ｙ

【作者名】
中之譲

【あらすじ】
晴れてＳｅｅＤになれた３人に初めての任務が舞い込んだ！
統治された大国の小さな領で羽ばたくレジスタンス、渦巻く大国の陰謀と不思議な夢・・・
果して彼らの運命は？
かけだしの若き傭兵の物語が幕を開ける、シリーズ第２弾！

旅立ち（前書き）

ついにパート？へ移行です。～終わりの始まり～を読んで下さった方もそうでない方もよろしくお願いします！

旅立ち

朝霧が日によって急速に掃除されたあとのバラム島は、少しばかり肌寒かった。モンスター達は既にその牙を光らせ、夜行性の者は既に深い眠りに落ちている。しかしアホウドリ達がいつものように見下ろすバラムガーデンでは、ＳｅｅＤ就任パーティーから2回目の朝を迎え、モチベーションと活気を失う生徒達で溢れていた。

中だるみ。よくいわゆる中学年がなんの目的もないためにだらだらすることを例えられる。確かに一部の者はイベントを乗り越えられず、彼らが数ヵ月後という次回のために頑張ろうなどと直ぐに開き直ることはできない。それは仕方のないことである。だがしかし、それよりも多くの一般生徒たちまで落ち込ませた事件がある。キスティス先生の事実上の免職である。

彼女は、覆面が大半を占める教師陣の中で唯一と言ってもいいほどに融通が利く対応ができ、生徒に親身であり、尚且つその美しい立ち振る舞いで魅了してきたガーデンに咲く花であった。その姿がもう見れないというのだ、彼女が担当する科目の成績はぐっと落ち込んでしまうだろう。少なくとも授業に対する意欲や関心は失われてしまうに違いない。

閉塞、確約されたガーデン生活の中において、生徒達にとって彼女が教師でなくなることは非常につらい出来事であったのだ。確かに生徒達も休日は外出を許されており、大概は近くの町へと遊びに行くことも可能なのだが、なんとも無味無臭な田舎町は若者の性に合わないというものである。カードゲームなる世界的娯楽も存在しているものの、失望感はそれを上回る。

そんな中、誰もが憧れ、みなが彼女のようになりたいと、常に目標にしてきた人物の存在が遠くなるということは、花のない芝生のようなものである。彼らはそう感じていた。しかし、キスティス先生の最後の言葉だけが彼らのホープであった。

『私に会いたいならね、ＳｅｅＤになってきなさい！』
彼女の目に浮かんでいた涙は、生徒たちへの愛情の表れだった。また、自らの生徒におかれる立場をよく理解し、それをすべて受け止めた上でのこの言葉は、厳しいようではあるがベストな表現ではあったであろう。きっと、今までいじょうに鍛錬に励む者たちの姿がいずれ戻って来るはずだ。

最後の最後まで愚痴をこぼす3人組を食堂のおばちゃんが追い出したころ、そんな憂鬱な彼らの心を躍らせるものがあった。なんと若きＳｅｅＤが早くも任務に就くというのだ。そのうちの一人が9時という始業直前に、本来ならば教室へと急ぐはずの大衆の感情を鼓舞している。半袖短パンのその少年は浮くボードのようなものを見事に乗りこなし、みんなの目に入るように中央ロビーを旋回していた。その電気的な音と乗り手の上手さに2階の教室前にいる者は身を乗り出して喚き、ガッツポーズをしながら興奮し、興味のないふりをしていた者や試験に落選した者も今では自分の想いを重ねて彼を励ましている。
生徒達のコールがピークに達するのを確認すると、横顔に刺青があるその少年は大きく手を振りまきながらボードを唸らせて消えていった。

対してこちらでは・・・
アナログな唸りが地を揺らすように響いている。正面玄関前の広場では特別にガーデン車が横付けされ、吹き出す排気が植木を曇らせる。どうやら曇っているのはそれと疲れ気味のスコールの顔だけではないらしい。覆面教師は片足でリズムを刻みながら時計を気にしている。

「・・・・あと１０秒」
鮮やかな空色のボードと海色の短パンは風を切ってカードリーダーを飛び越えた。
「９」
事務のおじさんの制止も振り切り、そのただ弱弱しい声だけが響いた。
「８，７，６・・・」
次第に電気モーター音が大きくなってくる。しかしそれに負けじと覆面教師のカウントも大きく、加えて感覚が短くなった。
「４」
「２」
「１！」
「間に合ったぜ！！」
黄色のワンピースに身を包んだセルフィが楽しそうに歓声を上げると、ゼル・ディンはドリフトでその勢いを止め、ボードを跳ね上げ晴れやかに到着した。
「ガーデン内ではＴ－ボード禁止。忘れてはいまい・・・」
にこやかなゼルに対し、覆面教師はさめざめとしていた。ゼルが主張する、任務にも役立つという弁明は見事に否定され、Ｔ－ボードは没収された。黄色の覆面がいつにも増して不気味である。
「役に立つかどうかは我々が決める・・・」
「君たちはＳｅｅＤだが・・・同時にガーデンの生徒であることには違いない。いや、ＳｅｅＤだからこそ一般生徒の手本となるようにガーデンの規則を遵守しなくてはならない」

覆面教師はその威厳を見せながらゼルに踵を返すと、今までその様子を見守ってきた学園長と入れ替わった。
スコール・セルフィ・ゼルの三人は就任2日目にして初任務を任される。常に任務の許可を下す学園長は、そんな初々しい生徒達に初めての任務を与えるためにここにいた。
シドはまるで仏像のように”そこ”にいた。自分の役目が来て前に出たシドは、今日の天気を憂うかのような口調で話しを始めた。
＞i35690―43315＜

「さて、初任務ですねえ」
朝だからなのか、それとも緊張しているのか、学園長の表情は硬かった。
「君たちはこれから”ティンバー”へ行ってもらいます。そこである組織のサポートをすることが君たちの任務です。ティンバーの駅で組織のメンバーが君たちに接触する手はずになっています。」
「そのメンバーは君たちにこう話しかけてくるでしょう。『ティンバーの森も変わりましたね』と。その時君たちはこう答えるのです。『まだフクロウもいますよ』と。」
「つまり合言葉です。そして彼らと合流したのち、組織の指示に従いなさい」
適度な間を取りながらも一度に話し続けたシドは、ここで質問を許すかのように3人を見渡した。スコールは全て機械的に受け取り、セルフィも靴の裏を気にしたりと特に何もないようだ。だがしかし、ゼルは口を開いた。
「あの・・・オレたち3人だけ、ですか？」
彼は周囲をキョロキョロと見渡した後シドへと向きなおした。シドはそれを聞くと優しそうに微笑んだが、答えたのは覆面のほうだった。
「そうだ。この依頼は極めて低料金で引き受けている。本来なら相手にしないような依頼だが・・・」

「まあその話はいいでしょう、先生。」
シドは頭を掻きながら覆面の話を遮ると、スコールに歩み寄った。
「さて、スコール。君が班長です。状況に応じて的確な判断を下すように。ゼル、セルフィ、君たちはスコールをサポートし、組織の計画を成功に導くようにがんばりなさい。」
３人は返事代わりに敬礼をすると、車に乗り込んだ。鍵を渡されたことから成り行きでスコールは運転することになったが、２人の運転に一喜一憂するよりは自ら運転するという手間を取った方がまだいいというものだ。スコールはガンブレードを助手席に置いてセルフィが乗って来るのを阻止し、エンジンをかけた。

「あ、大事なことを言い忘れていました。バラム港の一つ手前にアルクラド村という農村がありましたよね？そこからは歩いて行きなさい。みなの親睦のためです・・・」
シドが懸命に背伸びをすると、赤いセーターが少し伸びる。
「了解・・・」
スコールはエンジンを強く蒸かして最後の一言に小さな抵抗を示すと、ガーデン車はゲートの階段を荒々しくかけ下ってバラム・ガーデンを後にした。

「学園長、せめてあの３人には時間を与えた方が良かったのでは・・・？」
去っていくガーデン車を見送りながら、覆面は訊ねた。
「確かにスコールは優秀ですが、チームワークがいまいちなのではないでしょうか？」

「さすがですね、ウェンブリン。あなたでなければスコールを気にする人はいないでしょう。なにせあなたは和の大切さを一番良く知っていますからね。多くの先生方は、まるで仮面をかぶったかのように物事の奥を見れないものです」

「普通の先生方は寧(むし)ろ他の2人を憂う事でしょうに・・・」

学園長がしっかりと答えてくれたことに、ウェンブリンはいやいや、と今までとは人が変わったように微笑んだ。覆面の下にそれは隠れているが、彼もまた温厚な人物のようだ。

「しかしウェンブリン、私は彼らを信じているのですよ・・・」

「信じている？」

「えぇ。あなたが私を信じていてくれるようにね、ダナー君」

ガーデン車のエンジン音が聞こえなくなると、2人はバラム・ガーデンを見上げた。

「今まで、そしてこれから。世界へと巣立っていくどれだけの生徒が・・・。一番大切なことに気付くのでしょうかねぇ」

ＳｅｅＤの実感

ブロロロロ…

文句のつけようがないほどの春道を、ガーデン車は走り続けていた。青々と色づいた緑の絨毯にはところどころ花々がグラデーションを添え、美しく映えている。不規則に濃淡の表情を変えるそれは、風の流れを彩りで教えてくれた。

　そんな晴れやかな景色とは相変わって、車内は実に冷めざめとしていた。

彼らが憧れ続けてきたＳｅｅＤ、すぐさま舞い込んだ初めての任務。実感など沸く隙（ひま）などなかったであろう。それにしてもこの雰囲気はあまりにも異様だった。

南に広がる広大な海。普段であれば青く穏やかな表情を見せるそれも、彼らにはモノクロに思えるのではないだろうか。何故なら走り出して３０分、車内は服役人とそれを輸送する看守のように指先一つの動きさえなかったのだから。

　その要因は、間違いなくドライバーにある。たいがいの者ならば開放された窓から心地よい風を感じ、ラジオから流れる”今週のヒットナンバー”に合わせて鼻歌を口ずさみ楽しむだろうが、スコール・レオンハートはそのような風情とは無縁な男であったのだ。

まばらにそっぽを向いた黒髪に、襟元にファーがついた黒いジャケットをはだけ、同じく黒いパンツに革のクロスベルトという負の出で立ちが象徴するように、彼は愛想というものがない。
逆に人を寄せつけないオーラさえ漂わせている。これは個人として

は構わないだろうが、初めての任務遂行にあたる班の長としては非常に問題ではあった。彼はただただハンドルを握りしめ、フロントガラスに映りこむひねくれた顔とにらめっこをしているだけで、無駄な要素は一切なかった。
そんなスコールに、後部座席に腰を据えるゼルとセルフィは戦々恐々である。下手にバックミラーを覗くわけにもいかないし、かといってじっとしているのも窮屈なのだ。実地試験にて成り行きで組んだとはいえ改まって挨拶することもなかったので、これからこのメンバーで先の見えない任務に取り組むことへの見えない壁をどうにかしたかった。
ゼルはというと、その居心地の悪さを解消しようと持ってきた本をバックパックから取り出したが、開いたり閉じたりを繰り返し、セルフィも外の景色を眺めるのに飽きたためか足をブラブラさせて遊んでいる。

「ねぇねぇ、スコール。ラジオつけないの？」
沈黙を最初に破ったのはセルフィだった。彼女は乗りものが大好きで、景色を見られるだけでも十分だったのだが、もっと”うきうきはっぴー”なドライブが好みなのだ。それに、この時間帯は「今日のブランチまみむめも♪」が放送されている。どうせラジオを聴ける環境ならば、是非とも聞きたいものである。
「ねえねえ、”もみむめも”聴こうよ、きっと気に入るからさ」
「・・・。」
敢えて少し明るめに運転席を覗き込むセルフィに、ゼルもこの空気を打開するチャンスとばかりに加担した。
「おうおう、明るく行こうぜ！スコール」
「・・・。」
「初任務だぜ、スコール。まさかなぁ、ＳｅｅＤになれるなんて

よぉ。特に実地試験なんて大変だったもんなぁ、セルフィ？」
「うんうん、そうだよぉ。Ｂ班探すのにいっぱい”くっつき虫”つけたんだからね。しかしうちらもＳｅｅＤかぁ～」

”ＳｅｅＤ”

戦争が過去になった現在、子供たちは実戦とは程遠い環境にいる。そんな中、若くして高い知識と身体能力を身につけ、魔法を扱うことを学べるガーデンは彼らの憧れであった。その戦闘能力のスペシャリストであるＳｅｅＤはなおさらである。自分もここで学べばヒーローになれる、そしてそれを誰もが学べるガーデン。ゼルやセルフィもそういうことを夢見てガーデンに入学したのである。それは他の生徒にも共通することであり、その中で他の人を押しのけＳｅｅＤになれたとあれば、喜びは一塩であろう。
しかし、スコールにとっては違う。彼のように家族がいない者にとっては単なる飯の種だ。ＳｅｅＤになれば早い時期から定期的に給料が貰える。それに、卒業後もなにかと有利に働くかもしれない。その点、彼はうわのそらの二人との認識に違いがあり、この空気の差を生んでいるのだろう。

「こら、よせっ！」
「いいでしょはんちょ～！」
しばらくスコールが無視を続けることの冷戦によって車内の秩序は一定だったが、やがて強行姿勢に出たセルフィとステレオのスイッチの覇権を争ったのち、武力攻勢の軍配は彼女に挙がった。

『みなさんこんにちは、トラビアからお送りする今日のブランチまみむめも♪のお時間が・・・』

「てへへ・・・まみむめも♪」

プツッというノイズがあった後に車内にもっともらしい陽気なDJの声が響き渡ると、セルフィは窓枠にあごを乗せながらBGMを鼻で奏で始めた。どうやら彼女は落ち着いたようだ。しかし、常にサイドミラーへ睨みを利かせている。それを経てスコールは、別にラジオを切る方が面倒くさいとばかりにミラー越しのメッセージを受け取った。

―しかし、新SeeDだけで任務を受けるとは、学園長は何を考えているのだろうか。

―確かに、実地試験で組んだ3人を揃える辺りはさすがだが・・・。

―まぁ任務とはいえ戦場に行くわけではあるまいし、妥当なのか？

―いや、そんな単純じゃないぞ・・・

スコールがそんなようにいつものように思慮に耽(ふけ)ていると、重大なことに気がついた。派遣先がティンバーであるということである。なんだかんだで車を走らせてはいたが、よくよく目的地について考えてみると、それなりにこの任務が厳しいものであると気がついた。ガルバディア領ティンバーは、ドール公国の南方に位置するフォレスト地方にある街である。要は、とにかく遠いのである。ただそれだけのことではあるが、今までバラム島を離れたことはないスコールたちにとっては、連絡手段もなく遠方に孤立するということはとてつもなく神経を使うことなのであった。

―それに、ティンバーがどんな場所だか分からないしな・・・。

『はいは～い、今日のラッキカラーはマリンブルーで～す』

「およっ？」

ゼルとセルフィがラジオの占いに盛り上がった頃、チラ、ホラと畑が姿を見せてきた。やっとアルクラド村に到着したのだ。緩やかな丘に段々畑が連なる光景はほのぼのとしている。しかしその背後に雪をかぶったグアルグ山脈が拝める光景は、荘厳だった。ハワイのような海に振り返ればアルプスがあるここには、果して観光客はどのくらい集まるのだろうか。

スコールはバス亭のような掘立小屋の前に見慣れた人影を見つけると、左足を緩めた。

「おいスコール、公共駐車場は村の奥だぜ？どうした？」

ゼルが運転席の様子を覗うと、フロントガラスの奥ではＳｅｅＤ服に身を包んだキスティスが両手を広げていた。

任務のための任務

「どうもどうも、みなさん仲良くやってる？」
油が無い機械のようにギクシャクとしていた3人を待ち受けていたキスティス、そしてシュウの格好は、農村においてよく目立っていた。一つ一つが大きい畑にちらほら”ステテコと麦わら帽子”が伺える中、きちっと暑苦しそうな制服を着こなした2人は珍しい存在である。

「先生、先生、なんでこんなところにいるんだよぉ？」
面識のある人が旅路にいてくれたことが心強かったのか、すかさず車を飛び降りたゼルが駆け寄る。
2人はいつも腰に手を当てていないと落ち着かないようで、最終的にはKXポーズを取ると笑顔になった。
「まぁ、ここじゃなんだからあそこで話しましょ」

先輩たちはまず道のど真ん中に駐車した運転手をこっぴどく責めたのち、丘の上を指さすと運転手以外は緩やかな畦道を歩き出した。

「真ん中に停めたままじゃ不便じゃない？」

〜〜〜

「のどかな村だよねぇ〜」
坂道を登りながら、セルフィは綿毛を吹き飛ばすのを楽しんでいる。
「おぉ、そうだぜ！なんてたって本島で一番大きな農村だからなぁ。アルクラド平野の由来はこの村にあるんだぜ！」

「えっ？ってことは、平野い～っぱいがこの村ってこと？」
「あぁ、そうだぜ！けっこうガーデンの生徒が多いんだよ、ここは」
「ふぅ～ん。そういえばゼルって港の出身だったんだもんね」
ゼルは話が咲いたことが嬉しかった。何より”常に冷めきった誰か”と比べて、地元について興味を抱いてくれた転校生によって少し緊張が和らいだ。
「お～い！はんちょ、早くぅ！」
冷めた男はノロノロとガーデン車を端に寄せていた。端、と言っても元から道幅のない田舎道に端などあったものか。それは誰にでも分かることであり、彼はあからさまな態度でそれを示している。
―いったい、どこに停めればさっきより便利になるというんだ？
再び道のど真ん中に停車した彼に丘から手を振るセルフィ。やはり彼女はスコールとゼルという”既存の不釣り合い関係”を中和するムードメーカーのようである。それを考えれば、この任務のメンバーにも希望が見えてきた気がする。シュウはキスティスの生徒達に一抹の手応えを感じていた。

丘から見下ろした茶色と緑のコントラストはとても美しい。菜の花やネギ坊主のように春を感じさせるものが揺れているのは、何とも言えない風情がある。しかしそんな中でかなり浮いた存在が、彼らの前にある近代的な建物だ。
「こだいせいぶつけんきゅうじょ？」
「そうよ、さぁ入りましょう」

結局は元の位置に駐車してきたスコールが追いつくのを待って、彼らはドーム状の大きな建物に入って行った。
「おおっ！すげぇ～なぁ！」
「なんか臭いねぇ～」
古代生物研究所には、その名の通り古代生物に関しての化石や標本が陳列されていた。体長１１ｍもあろうかという獣脚類の化石は圧倒的である。バラム島には比較的古代から存在されたとされるモンスターが生息しており、ここはいわゆるホットスポットである。近辺の森は未だに最強の肉食モンスターであるアルケオダイノスが闊歩しており、その生態に関して盛んな研究がおこなわれていた。
「ってゼル、ここは見学で来たことあるでしょう？」
あぁそうだったぜ！と頭をかくゼルに、キスティスは呆れた。

―まったく、彼は何のために本を読むのかしら？あら、スコールが何か言いたそうね。

「何か言いたいことあるでしょ、スコール？」
そのアルケオダイノスの骨格標本の前でキスティスは訊ねた。スコールは面倒くさそうな籠った声で唸った。
「で、俺達をここに連れてきた意図はなんなんだ？」
キスティスの先日の痛心の心情を察してか、代わりにシュウが彼らに対応した。
「あぁ、ね。任務のことは知っているわ。キミが言いたいのは、なんで丘に登ったのかってことでしょ？」
「そんなところだ」
「それにはまず私たちの任務を説明する必要があるわね」

―私達の任務？

その疑問を感じたのはスコールに限らず、他の二人も同じだった。古代生物研究所とエリートＳｅｅＤ、なにか興味をそそるものがある。”ふんの化石”に食い入っていたセルフィも顔を上げた。

「スコール、就任式の夜に訓練施設にいたモンスター覚えてる？」スコールがあぁという隙もなくキスティスは続けた。

「そのグラナルドについて調査をしに来ていたのよ。訓練施設に入り込むことなんて滅多にないから、何かあるんじゃないかって」

「おい、グラナルドってまだいたのかよ！？」

その話にはゼルが食いついた。ワイパーを強にした時のように、彼はスコールの視界で情熱を振りまいた。

これはスコールフィルターによって全て取り除かれた一部始終である。

「古代生物グラナルド！今では幻のモンスターと呼ばれているんだなぁ・・・」

「・・・それと遭遇したなんて・・・どうだったんだ？教えてくれよスコール・・・」

（痛い目にあったんだぞ、特にキスティス先生は・・・）

「・・・確か羽音は小型ジェット並みに大きくて・・・」

（いや、おまえの方が確実にうるさい）

「こら、ゼル！話を聞きなさい！」

シュウの制止もなんのその、既に鼻息の荒くなったゼルには糠の釘。男のロマンを刺激された彼には、学食パンを奢るからというありきたりなその場凌ぎも意味をなさなかった。

「・・・確か羽根の音だけで視力の弱い動物は聴覚を混乱させら

れるんだぜ！」
（おまえの・・・唾が・・・俺をさらに混乱させる）
「・・・手足は退化して、獲物を食べる時にしか使われないんだぜ！・・・・」
（まだ続くのか・・・？出来ればその目障りなおまえの手足も退化すればいいのだが）
（いや、そうなると口だけが発達する。それもご免だ・・・）
「・・・んでよぉ、幼生の時はラルドってんだよな！・・・・」
「羽根が無い代わりによぉ、ダイヤみたいな硬い甲羅・・・」
（おまえは羽根を伸ばし過ぎだ。あぁ、硬いシェルターがあれば入りたい・・・）
「・・・転がってよ！岩をも削り・・・・」
（そして静かな場所へ潜る・・・）

「なるほどなるほど！」
地べたに腰を下ろして一部始終を聞き入っていたセルフィの拍手によって彼の雄弁は幕を閉じた。ゼルは肩で息をし、スコールは額を押さえ、キスティスは天を仰ぎ、シュウは押され気味である。しかしそれでも疲れの色ひとつ見せずに平然としていたのはセルフィである。
「で、もういいかしら。時間もないし大事なことだけを話すわ。学園長から指示があったのよ。ここで旅立ちのサポートをしろとね」キスティスは深いため息をつくと、３人を待っていた目的を話しはじめた。サポートなどご免だとばかりの顔をしているスコールは馴

れたものよと、彼女は先を進める。
どうやらなんやら、サポートと言っても任務における注意点の再確認のみであった。私服で向かう意味を考えろとか、お金のシステムについてだとか、組織に従順にしろだとか・・・。

―舐められたもんだ

スコールはずっと斜め下を見つめて聞き流した。彼にとって気休めのために任務前に励まされることは、単なる子守唄のようなものなのである。全く持って必要がないのだ。

―結局は、ここまで来なくても掘立小屋の前で済んだ話じゃないか。

―そもそも、そんな基本的なこと百も承知だ。

「百も承知の人が裸の武器を列車内に持ち込むの？」
長年スコールを見てきたキスティスにとって、スコールの考えていることはお見通しだった。彼女もスコール含め3人が途方に暮れる事など心配はしていない。しかし、あくまでも心構えをここで説くのは隠れた目的のカムフラージュでしかないのだ。学園長を始めシュウ・キスティスも彼らの行動は心配していないが、戦力とチームワークが穴だと考えていた。

「さすがに、あんな物騒な物をぶら下げて歩いていたら、子供でさえ怪しむわ」
「ましてや、今から行くのは・・・」（分かっている、ティンバーだ。）
再び教師調で淡々と喋りつくすキスティスを上回る強い口調でスコールは制止した。
「分かった！ガンブレードのケースを忘れたことは気付かなかっ

た。感謝する」
　彼が声を荒らげたことにゼル、セルフィ、そして籠の中に飼われていたリスも飛び上がった。唾も飲み込めないほどに緊張感が張り詰めている。
　スコールは、自分が作りだした空気にも関わらず周囲が黙っているのは嫌いだった。彼はこの空気を打開するすべはないとため息をつくと、出口へと向かった。

―分かった。ケースを取りに戻ればいいんだろ・・・

「ちょっとスコール！どこに行くの！？」
シュウが大股で遠ざかる彼を引きとめた。
「あるわよ、ケースならここに・・・」

不思議そうな顔をするスコールに、キスティスとシュウは微笑むのだった。

～～～～

―心外だ・・・。
―酷い、ひどすぎる・・・
スコールはいつものように額を押さえ、さらには両手で顔を覆った。

「わぁ～、スコールも落ち込むんだねぇ♪」
「意外とコイツも単純だからよぉ」

―うるさい・・・。

先輩達が用意したガンブレードケースは歪(いびつ)だった。２つほど不自然に山があり、取っ手が両開きのケースの番(つがい)の役割を果たしている。

―これじゃあまるで・・・

「そうよ、ギターケースよ」

キスティスがまたもやスコールの口を務める。秋の稲穂のようにしなりと肩を落とす彼を見て、一同は苦笑した。

あらゆる事象に関心を持たないスコールにとって、ガンブレードは唯一と言えるほどにこだわりを持っていた。ただでさえ自分の心理的なプライベートゾーンに干渉されることに嫌悪感を抱く彼は、愛着のあるガンブレードの惨めな扱いに非常に心を締めつけられる思いに違いない。何故ならティンバー行きの列車には夕方発という制約があり、ガーデンへケースを取りに行っては間に合わないことを一番よく理解しているからである。加えて、仮にケースを持ってきていたとしても持ち運びには適していないのだ。それはあまりにも大きいため、どちらにしろ人目を引く結果となっていた。故に彼はギターケースを用いるしかなかったのだ。しかもそれを学園長及びキスティス達に見透かされていたのだから、そのショックはとても大きいに違いない。

「これじゃあギターケースというよりチェロケースだ・・・」

大きなギター型のそれに丁寧に肩かけ用のベルトまでくっつけてあることにスコールは呆れの域に達しながらも、なくてはならないことは自分が一番良く理解していたために渋々受け取った。そして思うのである、「絶対に、できるだけこれに格納しないように努めよう・・・。」と。

「どう、気に入ってくれた？チェロ弾きさん♪」

そう微笑むキスティスとは目を合わせないようにしながらスコール

はケースを立て掛けると、なにやら中からゴトンという鈍器が落ちる音がした。ゼルもセルフィもその音には気がついたようだが、その音が無かったかのようにシュウは声を張り上げた。

「あともうひとつ、あなた達3人には大事なことをやってもらわなくちゃね」

任務のための任務（後書き）

話が進まなくてすみません（^__^;）

ゼルへの課題

ゼルは一人、震えながら森の中へと入って行った。それは武者震いであり、同時に緊張から来るものでもある。

―俺だけ遅れを取るわけにはいかねぇんだ

―上を目指すには、何としてもクリアしないと・・・

彼がそう引き締まっている訳は、シュウが提言した”大事なこと”にある。それは契約するG・Fの追加だ。

現在のところスコールは3体（イフリートを除けば2体）、セルフィは1体、ゼルは実質無契約の状態である。それを危惧した学園側が任務の前にG・Fの支給を手配しようとしたのだが、キスティスらが拒んだために（ゼルはそれに対し猛烈に憤慨した）、3人のG・Fを分け合って利用する方向に決定したのである。そうすれば少なくとも1人1体を召喚できる体制におくことができる。しかしここでの問題はセルフィとゼルだ。スコールは複数体と契約済みなので元から憂慮さえていなかったが、2人は1体ずつしか契約していないので、スコールのG・Fと契約をしなくてはならない。セルフィは電波塔での功績をケツァクウァトル、シヴァ認められており問題はなかったのだが、ゼルはというと・・・。

「ぬわぁ～にが、”誰だこの少年は？”だ！何が”妾（わらわ）はニワトリとは契約しない主義でな”だ！ふざけんなってーの！」

＞i35079―43315＜

電波塔の時にいなかったゼル（正確にはダウンしていた）は、スコールのG・Fには認められることはなくあしらわれた上、セイレーンにも拒まれたのだった。そこで拗ねた彼はみすみすシュウとキス

ティの口車に乗せられて、今こうして森の奥へと突き進んでいるのである。
「アルケオダイノス倒してきたら、彼らに認めてもらえるかもよ・・・」
失意のどん底、憤慨の沸点にいたゼルは、この無謀とも言える条件をみすみす飲みこんでしまったのだった。

アルケオダイノス。いにしえの時代から生きている生物で、そのパワーとスタミナは非常に高い。そのためにどこの国の軍やガーデンの公式的な指導の下でも
”もしも、出会ってしまったならば、さっさと逃げてしまったほうがよい相手である”
と評されるほどの大型獣脚類である。対峙するとなれば、到底敵うどころか命の危険まで脅かされる存在であり、それはゼルも既知のはずである。
しかしそれと表裏一体であるかのようにアルケオダイノスの骨は非常に貴重な物として取引されている。例えば学者達の研究材料としても重宝され、固いがゆえに武器の材料としても用いられており、もしかしたらゼルもそれを分かっているのかもしれない。

―俺のグローブの材料にしてやるぜ！

なんて、おそらく彼にはそんな余裕などないだろうが。

「キスティ、彼は今頃なんて思っているかしらねぇ？」

小高い丘の上で、４人と3体は腰をおろしていた。スコールは”チェロの悲劇”が抜けきらないのか仰向けになり空を見つめ、セルフ

ィは初めましてのあいさつを2体と交わし、シュウとキスティスは木陰で談笑していた。セイレーンの奏でる華やかなハープの音が辺り一帯を優しく包んでいる。
「さぁね、彼って見かけによらずビビリだからちょっと迷っているかもよ」
「そうね、アルケオダイノスなんて3人がかりでも敵わないものね」
「でももし倒せなかったらというか、実際このG．F問題どうする？」
キスティスは膝の上に舞い落ちてきた木の葉を払いながら訊ねた。
「う～ん・・・まぁあれがあるからいいでしょ。そっちの方が確率低そうだけどね」
「ハハハ・・・」
キスティスは笑顔の下に一抹の不安を覚えていた。
ーシュウは笑っているものの、G．F問題がしっかりしないと彼らの身の安全が危ぶまれるわ。ギャンブルじゃなくて確定要素がないと彼らの任務遂行そして命に関わるのだもの・・・。スコール、ちゃんとやってくれるかしら。
「んまっ、ゼル君がアルケオダイノス倒してくれれば私達の任務もはかどるでしょう？そうしたら儲けものよ、元気出しなって！」
どうやらキスティスの悩みの種を掴めきれていないシュウは、幼げに微笑むのだった。

＜メガネは伊達じゃないぞのコーナーpart2＞

どうもお久しぶりね、キスティス・トゥリープよ。今日は私の代わ

りにシュウ先生が解説してくれるわ。
みんなちゃんと聞くのよ！
「は～い！（キスティス先生だけでなく、シュウ先生まで見れるとはラッキーだなぁ）」
どうもどうも、とは言っても元教師のシュウだ。今回はキスティに代わってボクがG．Fの契約について解説しよう。
「（ドキドキ！）」
G．Fとの契約の仕方の3方法は覚えているわね？今回話すのはG．Fとの契約のバリエーションなんだけど、いいかな？
「は～い！」
ちょくちょく『学園のG．F』とか『学園からG．Fを支給』という言葉が登場したけど、それもG．Fの契約の変種の一つよ。言わばそれは学園と契約したG．Fは学園に従事するため、その指示に倣うということで、単純に契約者が個人か団体かと違うだけのこと。
「へぇ～」
だから複数人と契約するという事も可能ってわけね。まぁそんな凝ったことをするのはバラム・ガーデンだけなんだけどね。ってかそもそもG．Fの公式使用許可出しているのはバラムガーデンだけだったよね・・・。
「うんうん」
そもそもなんでバラムだけかっていうと、
『シュウ、時間みたいよ。尺だってさ。』
あら、そう。意外と早いわねぇ、あんたもこれじゃ大変だわキスティ。
ってことで、以上が元教師シュウの・・・＜元教師は伊達じゃないぞのコーナー＞でした！

手には汗がにじんでいる。
ゼル・ディンはひたすら森の奥へと突き進んでいた。なんで自分だけ認められなかったのだという悔しさ、そして自ら歩み寄っていかなければならない使命と戦いながらも、彼は進んでいる。もう木漏れ日が無くなったことや肌が寒く感じさせることが、だいぶ中心部に近づいたことを示している。高鳴る心臓の鼓動、唾を飲み込む音、それがいつ地鳴りに変わるのか彼は細心の注意を払っていた。

―奴は鼻がいい。もう俺が来たことも察知しているはずだぜ！

全くゼルの博識ぶりには驚かされる。しかし、一切どう戦うかについての戦略（プラン）が立てられていないことは彼らしい。もっとその知識を生かせるところに利用することを思いつかないのかと、この物知りゼルを疑う。思えば常に感情が先走って、そのことで損をしてきた。例えばパンがそう・・・

ドシン！

今、確かに地響きのようなものがしてゼルは立ち止まった。すぐにでもあの大木の間から巨大な図体が姿を表すのだと思うと、彼はぞっとしていることだろう。大体、よくアルケオダイノス討伐を引き受けたものだ。見栄を張りたかったのか或いは勢いかは分からないが、誰一人として成功を予想している者はいないだろう。もちろん本人だってそうだ。
しかし、彼は進んできたのだ。研究所では皆が逃げて帰って来ることを待っているだろう。しかし彼は引き返さなかった。拳という武器だけを引っ提げて、たった一人この森の中へ飛び込んだのだ。
目的？もしかしたらもう彼には目的などないのかもしれない。彼がここに来た意味はG・Fに認められるためでもスコール達を納得させるためでもない！自身を自分として認めるために挑みに来たの

だ！

　これはゼルの戦いである。アルケオダイノスに勝つか負けるかではない、アルケオダイノスに挑むか挑まないかが彼の勝負なのだ！この長い感情の起伏という道程の中で、彼はいつのまにか本来の目的を見失っていた。それはいいとしても、彼の本気は白を黒と言われて信じる人と同じくらい真っ直ぐである。加減と言うものを知らない。だからこそここまで来れたのではあるが・・・

「いくぜぇ～～～！」

顔を出した猛獣の咆哮を上回る迫力でゼルも自らを鼓舞し、太ももに鞭を入れると颯爽とかけだす。一方、バラムの王者も対抗せんとしてその全貌を彼の前に露わにするのであった・・・

大きな頭、そしてバランスを取るために平行に伸びる太く長いしっぽ。赤茶色と青色の肌はまるでトカゲを大きくしたようである。もしあんな口に噛まれでもしたら、痛みを感じるまでもなくあの世行きであろう。滴る涎がまるで梅雨時の雨垂れのごとく流れる光景に、ゼルは腰を抜かした。

　アルケオダイノスは獲物（チキン）を見据え、今日のブランチはこれで決まりであるとでもいうかのように、重い2足を地を鳴らしながら一歩一歩向かっていった。ヤツが大地を捉えるたびに地震のように地を揺るがすのは、王者の貫録に相応しいものである。その度にゼルのお尻が浮き上がるのは見ているならばニヤリとしてしまうが、そんな現実を前にしたら誰でも脳内回路がシャットダウンしてしまうに違いない。この男も、不安や嘆願のような感情など抱く余地がなく、恐怖で呼吸さえも碌にできなかった。

　アルケオダイノスは彼の目前で足を止め、彼を見下ろした。涎のカーテンがダラダラと近づいてゆく。

そしてなんとも言えない野生の悪臭が彼の鼻をついた。このままで

はモグラ叩き状態になってしまう、あるいは一発で口の中におさまってしまうのだろうか。ゼルは少しでもの抵抗の姿勢を見せるべく王者を睨み返した。黄色く鋭いアーモンドを直に見るのはあまりいい気はしなかったが、このまま弱腰ではいたくなかったのだ。
だがしかし、アルケオダイノスは顔を逸らすと何事もなかったかのように通り過ぎてしまった。再び一定のテンポでゼルの体が浮き上がる。そして次第にそれが止むと共に木々が折れる音も消えていった。

「ふぁ〜〜助かったぜぇ！」

ゼルは脱力して大の字になった。ありとあらゆる体中の部位がフルマラソン後のように疲労で収縮を繰り返している。息を吸う事を覚えた魚のように、彼は呼吸を楽しんだ。

「綺麗な空気だぜ！食堂のパンの味がする！」

待ってくれ？何か忘れてはいないだろうか。彼は、彼はあくまでも・・・・

「あーーーーーっ！」

ゼルはまどろみかけていたが重要な仕事をしていないことに気付くと、跳ね起きて王者の後を追いかけて行った。

＞ｉ３６０００－４３１５＜

Don't be afraid～恐れないで～

一行は落ち着いていられることはできなかった。何故ならゼルが森へ消えてから二時間、帰ってくるどころか何一つ音沙汰が無かったのだ。

「ちょっと言葉が過ぎたかしらね」

一番忙しないのは軽い一言で彼を地獄の旅に向かわせたシュウである。彼女もまさかゼルが本気にするとは思ってなく、ほんの冗談でけしかけてみただけでなのである。

「シュウだけの所為ではないわ。彼の性格を知っている私もいけないのよ」

一性格を知ったかように自己満足に浸るから教師は嫌なんだ

教師の顔色が変わったことは当然ながらスコールにも伝わっている。アルケオダイノスの恐ろしさは賢い者ほど強く刻み込まれているものだ。

スコールは、何やら面倒なことになりそうだなと、一つの綿雲を追いかけながら感じていた。

まだ決して”チェロケースの悲劇”のショックが引いたわけではなかったが、今はそれより昼食の方が心配なのだ。腹を空かせば戦闘に支障をきたすだけでなく、思考力をにぶらせる。腹が減っては戦はできぬとはまさにこのことで、スコールは空腹を満たしたかったのだ。

ー俺には関係ない

大体、先輩方が余計なことをけしかけなければこんな事態にはならなかったはずである。それに本当に鵜呑みにするあいつもあいつだ。スコールはこの任務の行く末を憂うのであった。

当然ながらガーデンマドンナ二頭（にがしら）の不安は的中している。彼女たちが煩うかなり前からゼルは拳を唸らせていたのだ。

「オラオラオラ！この頭でっかち野郎！」

アルケオダイノスに追いついたゼルは、とにかく闇雲な手段に講じた。まずは何を思ったかしっぽにしがみつき、虫を落とさんとする王者の”しっぽふりふり”に耐え、やがて王者が彼を振り落とすことに諦めると、ゼルはしっぽを伝って背中に腰を据えた。

なぜ彼がこのような行動をとったかと考えるならば、きっとそれは食われないためであろう。バラムの王者の胴が長く手が小さい容姿はＴ－レックスと似ている。つまり細かい動きは苦手なために、背中にいれば地に足をつけているよりも遥かに安全なのである。要はまだ彼がビビっているということだ。

「いやぁ～、しっかしすごいスタミナだぜぇ～。確か本には息切れが早いって書いてあったのによぉ。これじゃあ短距離型でも遠距離型でもなく、中距離型のモンスターだな、最大時速は３０ｋｍってとこか、うん。」

ーって、感心してる場合じゃねぇぜ！どうするよ、大体どこへ行

くんだこの馬は・・・

―こうなりゃ”男ゼル”、覚悟を決めるか！！

突然、森林を掻きわけて進むアルケオダイノスの前方に突然火の手が上がった！その炎によって緑のベールを支えていた両柱がメキメキと音を立てて崩れていく、ほどでもないが、ゼルの放ったファイアはぼやを起こしてアルケオダイノスの足を止め、そして興奮させた。

―けっ！見てろよ怪物野郎！

ゼルは、がさつに上下する背中に立ち上がろうと試みた。不規則なその揺れは立とうとするほどに彼の足をすくい、その度に１０ｍ下の地面が彼の目に何度もちらついた。ふらふらしながらもなんとか直立すると、その始終は枝葉が顔面を直撃したりと非常に”決まらない”ものではあったのだが、彼は自棄になったかのように背中を走り出した。当然ながら背中の上をトタトタと走り回るネズミにアルケオダイノスは落ち付いているはずがない。ついにロデオの敗者は地面にたたきつけられ、勝者と地上で相対することとなった。

振り落とされた衝撃で肺は圧迫され、背中が強く痛んだ。幸い頭を強く打ち付ける事はなかったが、ゼルはここにきてかなりのダメージを受けた。

―やべえ・・・

―そもそもファイアが不発とは・・・スコールが見てなくてよかったぜ！

しかしゼルはそんな小さな心配をしているほど甘い状況ではなかった。彼が顔を上げるや否やしっぽが飛んできて、彼は見事にしならせた定規によって弾き飛ばされた。

「ぬわぁぁーーーー！」

ゼルの身長ほどもあろうかという太いしっぽが彼の側面を打ちつけ強い痛みが走る。

―クソッ！右手が・・・折れたか？

ゼルの武器は体術。ボクシングだけではなく、体全体を使ったアクロバティックを得意とする彼にとって、片手を失う事は言わば致命的である。何故なら体を支える事に支障をきたしたり、逆手を使う時にもその威力が下がってしまうからだ。ただでさえ相手は人々から恐れられている古より生き抜いてきた肉食獣である、今の状態のゼルは戦い方を知らない子供に等しいといっても過言ではないのだ！

それでもバラムの王者はその貫録を見せつけるかのようにのしのしと彼を食わんと近づいていく。ゼルは草を握りしめながらヤツを睨んだ。どうやら痛みは全身に強く走っており、立つことさえ難いようである。再びアルケオダイノスが彼を見下ろし大きく咆哮をすると、生暖かく臭い息が彼を包み込む。

―あぁ。せめて死ぬ前に食堂のパンが食べたかったな・・・

ゼルは意識を失った。

―そうである。彼は深手だったのだ。

―一人で立ち向かうのはあまりにも無謀なことであったが、それは常に勇敢と隣り合わせなのだ。

―ＳｅｅＤに見事就任したゼル少年は、みんなの憧れであった。

―だがその命もここで星となった。

―誰もが流星を見るたびに偲ぶであろう。

―バラムの風雲児、Ｚｅｌｌ　Ｄｉｎｃｔを・・・・

―誰もが偲ぶであろう、バラムの風雲児、Ｚｅｌｌ　Ｄｉｎｃｔを・・・・

―ん？

―ってあれ？

―俺、生きてるーーーーーー！？

ゼルはそっとまぶたを開けた。以外にもまぶたは重くはなくいつものようにすっと開くと、銀幕の世界が蘇った。アルケオダイノスがしっぽを振り振り遠ざかっていくのが見える。

―なんでだ・・・・？

―俺、まずいのかよ！？

―しかし、本当に動けないぞ。

残念ながら風雲児でも憧れでもなんでもないただの中途半端なゼル・ディンは、為す術もなく途方に暮れるのであった。

「”回復魔法！”」

―情けない、本当に情けない・・・

女性陣が彼を懸命に手当てする声が響く中、スコールは額を押さえていた。そう、彼が中途半端男の第一発見者なのである。

ゼルへの煩いがピークに達したとき、遂にシュウが捜索案を持ちかけた。そして彼も任務に支障をきたすからと渋々捜索に参加したのである。今回は偶々にG・Fが召喚されていたので、それぞれ連絡用に伴って1人ずつ散らばって森を散策していた。当てもないこの迷子探しは難航を喫すかに思われたのだが、スコールが少し進んだところで立ち上る狼煙を見つけたために向かってみると、そこでは体を強張らせながら転がっているゼルがいたというのである。

「でもよく食べられなかったよね、チキンは苦手なのかなぁ？」

「う、うるせぇ！」

セルフィがゼルをからかうのも尤だ。スコールもだからこそ頭を抱えていたのである。

―普通、倒すか食われるかが定番だろ。

―新しいな。へばらされて、放置されるのって・・・。

「でも、生きているだけ幸せに思いなさいよね。ま、私が言える立場にはないけどね、ゼル君！」

シュウが口元をひきつらせながらも笑顔で彼を慰めた。

―でも、なんで食べられなかったのかしらねえ？

―こんなの初めてだわ。まさか満腹だったとか？？

シュウは腕を抱えた。彼女もまた、正直言えばゼルが食われてしまっているものだと重い、後ろめたさを感じていたのである。だが倒すということ以上に意外なことである”放置状態”に若干ながら笑い出しそうな部分もあった。

―なんておかしいの、この姿。ダメージを負ったチキンって鳥ガラって呼ぶのかしらねぇ？

「フフフフ・・・・」

「へへッ」

「ハハハハハハ・・・・」

笑いだしたのはシュウだけではない、キスティス、セルフィも一斉に堰が切れたかのように笑い始めた。

「ちょっ、ちょっと何がおかしいんだよ！」

むっとしたというよりちょっと困惑したゼルは救いを求めてスコールを見たが、彼もまた口元がにやけているのである。

「ちくっしょーーーーー！俺は戦ったんだぞーーーーー！」

ゼルの咆哮は、どのアルケオダイノスよりも高くアルクラド村の森に響き渡るのであった・・・

開けちゃだめよ

スコールは怪訝だった。

キスティス、シュウの二人は、任務の続きがあるからと言って3人が乗ってきたガーデン車で引き返して行った。このようにリレー形式で車を回すシステムが基本的なのだ。何故なら出張しているガーデン車が少なければ少ないほどガーデン非常事態時には多くの車を使う事が出来るし、なにより荒っぽい任務に当たる彼らが一つの車にまとまれば、相対的に故障する車が少ない。修理代も何もかもよろしいシステムなのである。

スコールが訝しがっているのはそんなところではない！彼女達がしつこいほどに苛立たせるのだ。

「開けちゃだめよ、絶対だめなのよね、開けちゃ」

一一体何のことなんだ！

特に対象があるわけでもないに拘(かか)わらず、彼女達は三人を送る際に狂ったように贈る言葉を浴びせまくったのだ。時にそれは名残惜しそうに、時にそれは生徒への煩悩の現れであるかのように、時には馬鹿にされているのではないのかと言うほどに彼の頭の中をリピートした。

『開けちゃだめよ、開けちゃだめよ、開けちゃダメよ』

スコールはチェロケースをだるそうに引きずりながらその呪いを振り切ろうと必死だった。

「ねえ、はんちょ！ちょっと待ってよ～」

「歩くの速過ぎるぜ！」

二人にそう気付かされるまで、彼は自分が意味もなく競歩に勤しみそれがガラゴロと一定のリズムで音を立てていることが苛立ちを増幅させていることを理解できなかったであろう。

「ねぇねぇ、はんちょ。”開けちゃだめって”何を？」

間が持たなくなったことと、おそらくゼルもスコールも答えが見つかっていないことだと確信したセルフィは、3人が最も煩わしく感じていた頭の中の謎を解く方法を探したかったのだ。これには面倒くさがり屋のスコールも同調したようで、ここから三人の会話は始まった。

「あのよ、まだ列車まで時間があるしさ、話すなら俺んチなんでどうだ？」

ゼルは二人の顔色（特にはんちょ）を覗うように控えめに持ちかけたが、任務の前に一度物事を整理したかった彼らには余計な心配であった。

◇■◆■◇◇■◆■◇◇■◆■◇◇■◆■◇◇■◆■◇

「へへへ。『武器持たずして戦いに勝利する方法　第5項目第一条心理戦の部一箇！』」

「名付けて開けちゃだめよサブリミナル作戦！フフフフフ」

陽気に声を揃えて祝杯を挙げていたのは紛れもなくシュウとキスティスであった。

「でもシュウ、サブリミナルにしちゃあ表立ち過ぎているわよね」

「いいじゃない、結局彼らは困惑していたのだからさ。見た？スコールのあの顔」

「あれは『俺には関係ない、別に、』じゃ済まない時の顔よ。数年前の野外実習の時以来だわ」

「あれまキスティ、あんな無愛想クンにもそんな時代があったっけか？」

「フフフフ・・・・ハハハハハハ・・・・」

彼女達の策略、そして笑い声は、現在はこのガーデン車の中だけの秘密である。しかし、彼女達も凝ったことをするものだ。生徒達を弄んでいいのかっ！！・・・

◇■◆■◇◇■◆■◇◇■◆■◇◇■◆■◇◇■◆■◇

「でもまさかよぉ、あのアルケオダイノスがG．Fだったなんて信じられないぜ！！」

「なんだいおまえ、あのアルケオダイノスとやったのかい？相変わらずバカだねぇ・・・」

しかしG．Fアルケオダイノスがシヴァたちと知人？であったとは奇遇なものである。結局、スコールがG．Fを疎ましく思っていたことやG．Fアルケオダイノスによるゼルの恩赦によって、結果的

にゼルとシヴァたちの契約が成立したことは非常に大きなことである。シヴァやケツァクウァトルたちも、まさか少年がアルケオダイノスに丸腰で立ち向かうなど想像もつかないことであったので、倒すという条件を緩和したのだ。アルケオダイノスが彼を食べなかった理由はG．Fだからなのである。ゼルが相対したバラムの王者は、王者の中でも王者だったのだ。

ゼルの母親は食堂のおばさんのようなふくよかで温情にあふれた人物であった。肌身離さないエプロンは母の愛の証、そしてトレードマークの青いバンダナは力強さの象徴であった。
ゼルの家は一般的なバラム港造りのものである。入り口は地面に少し掘り下げたところにあり1階もその半分は地中にあるため、全体的な住宅の高さが低いものだ。港町と言えどもバラム町は少し高台に気付かれているため、満潮時の浸水や津波の影響など微塵もなく、逆に潮風から守られて都合がいいというものだ。スコールやセルフィなど初見のものはこの内部の様子から蟻の巣を想像したことであろう。

「んじゃちょっと、任務について話し合うから入ってこないでくれな」
「ごちそうさまでしたー！」

ゼル母特製のバラムフィッシュのムニエルを昼食としていただいた後、別室に移動し”開けちゃだめよ”について話し合うことにした。彼らは列車が発車する4時までに呪縛から逃れたかったのだ。
3人は円卓の周りに腰を下ろした。スコールは額を押さえ、セルフィも俯き、ゼルはいつものように落ち着きがない。

「『開けちゃだめよ』ってさ、何をだよ？」

―俺に聞かれても困る
「なんで『開けちゃだめよ』って言われたんだよ？」
―俺も知りたい
「どうしてなんだよ？何をなんだよ！？」
「そんなの俺に聞くな！！」
バシン！
答えのないゼルの問いにスコールが啖呵を切りちゃぶ台を叩くとしばしの沈黙が訪れた。

『開けちゃだめよ』
それはいつもそばにいて
『開けちゃだめよ』
いつも彼らを誘惑する
『開けちゃだめよ』
開けてはいけない禁断の扉
『開けちゃだめよ』
見てはいけない秘密がそこに
『開けちゃだめよ』
無知も有識も心奪われ
『開けちゃだめよ』
開けたところで無知にも有識にもならぬ
『開けちゃだめよ』
それはいつもそばにいて
『開けちゃだめよ』
ちょっとだけよと誘惑をする・・・
>i36245―43115<

「あっ、あのさぁ」

沈黙を破ったのはセルフィだった。突然の声に同時に顔を上げた二人に押されながらも彼女はスコールの後方を指さしながら言った。

「思ったんだけどさ、開けちゃだめよってチェロケースのことじゃないの？」

―そうだ、そうだ！いいぞセルフィ！なんでそんなことに俺は気付かなかったんだ！

彼らは答えが見えたことに胸が躍った。早く開けたい、早くそれをあけたい！！その衝動が急激に押し寄せる。スコールはチェロケースをゆっくりと円卓の上に乗せた。その過程で中を何かが転がる音がした。

―やっぱり！

彼らの期待は確信へと変わった。早く開けろ！早く開けろ！と好奇心が胸にビートを打つ。スコールはさっそく留め金に手をかけた。と同時に彼の中に迷いが生まるのである。

―開けろと言われて簡単に開けていいのか？普通、そういうのって開けちゃいけないパターンだろ？

スコールは二人の顔を見た。

―いや、ガンブレードを入れるもんだから開けてもいんじゃねえ

のか？

ゼルはセルフィの顔を覗った。

―でも、それ自体が罠かもね。入れなくても他の手があるかもしんないし。というより早く中を見ようよ！

セルフィはスコールに頷いた。

―というか、そもそもこれはガンブレードの入れものではないのだが・・・

―今は俺には関係ない・・・

ゼルの額には汗が、セルフィは生唾を飲み、スコールの手は小刻みに震えている。とうとう3人は誘惑に負け、適当な根拠を作りだし期待に胸を膨らませてえいっとチェロケースを開けた！

「ぬわぁにぃ～～～！」

「なんで～～～！」

「・・・。」

三人は言葉に詰まった。何故ならチェロケースの中にはさらに”開ける物”が入っており、今回はわざとらしく『開けちゃだめよ』の張り紙がくっついているではないか！なんということだ！！今までのあのドキドキ感のスリルや、”開けちゃだめよ”に抗う事で満たされると信じていた満足感、そして何かしら秘密があるであろうと信じていたその希望は・・・一体何であったというのだ？

彼らの期待は淡く崩れていった。

「しかしよぉ、なんだこのちっこいの・・・」

「・・・。」

「おとぎ話に出てくる魔法のランプみたいだねぇ」

「ん？魔法のランプ？俺、聞いたことあるぜ！」

一俺もあるぞ・・・これは非常に厄介な・・・

魔法のランプを手に取ったセルフィにスコールが顔を上げると、なんとセルフィは”あれ”をしていた。

そう、誰もがしたくなるあれを！

「やめろ！セルフィ！」

「へっ？」

スコールの制止ももう遅かった。セルフィの陽気な”すりすり”は効果を為しており、フタが急激に飛んで・・・

煙と共に中から魔人が・・・

いや、違うランプから出てくるのではない、ランプへと入っているのだ！

目まぐるしく変わる世界の中で三人は浮遊感を感じると、ランプから広がるまばゆい渦の中に部屋ごと吸い込まれて行く！

「くそっ！抗えねェ」

「みんな、ごめんねぇ～～～！」

「・・・。」

―かなり面倒になるぞ・・・

―ん！？なんだあれは！

スコールは流れゆく中で２つの眼をみた。それには体があるわけでもなく、ただ単に渦の中に浮いていて・・・。

＞ｉ３６２４６―４３１５＜

魔法のランプ

掃除機の吸入口に手をかざしてみてほしい。強烈なバキュームによって手が吸い寄せられ、気圧を感じる事ができるだろう。
彼らもそれに近い感覚を体中に感じていた。ただ一つ違う点と言えば吸い取られるというよりも押し縮められるといった感覚に近いのかもしれない。粘土を掴むような圧力が今は体全体に感じられるのだ。肺は圧迫され、頭もジンジンと痛みを増す。やがて彼らは早く抜けだしたいという願望に強く駆られるようになった。
覚えているだろうか、子供のころに土管のなかで密集したときの窮屈な閉塞感を。覚えているだろうか、初めてジェットコースターに乗った時の体が縛られる感覚を・・・

現在の彼らは、どこかを雑巾のようにねじられながら”移動”していた。嘗てランプから広がった渦は小さく収縮しており、まるで滴る紅茶が逆再生するかのように細い細い注ぎ口に音もなく収まっていく。やがてそれは水に花火の燃えカスをつけた時のようなシュッっという心地よい音を立てて、全てがランプに吸いこまれた。
真鍮製のランプは、カタリともせず何事もなかったかのようにゼル宅の居間に転がっている。

スコール・レオンハートはフラストレーションの塊だった。
―誰かお願いだ、解放してくれ・・・
―お願い？また俺は他人に、何かに頼るのか？
―一体、この感覚はなんなんだ？
―苦しい・・・だけ
―寒くも、うるさくもない・・・

―ここまで何もないと、逆に・・・・・・・・・
―嫌だ。

『・・・・苦しいか？』

―誰だ！？

『どうだ？苦しくないのか？』

声は3人にゆっくりと語りかけた。
それはこの一時一瞬を楽しんでいるかのように、且つ怒りを帯びているかのようにも受け取れる。だがしばらくそれが聞こえなくなると、3人はパッと宙にほうり出されるような感覚を覚えて、地面に体を打ちつけた。

「いたたたたぁ・・・」

「なんだったんだよ、これ」

「・・・。」

そこは闇だった。彼らの姿さえも覗う事が出来ないということは、一切の光源がないということだ。故に彼らは半永久的に目が慣れるという変化を感じる事はないだろう。

―暗い
―真っ暗だ
―どこだこれ？
―どこ？いや、そもそも場所なのか？

訊ねたいのは彼らの方なのに、どこからともなく低くしわがれた声がはっきりと響いた。
『ワレの眠りをさまたげる者は、誰だ？』

「そっちこそだれだい！」
「姿を現しやがれ・・・・・・！」

全てを支配している余裕からであろう、声の主は彼らの呼びかけに以外にも素直に応じ、光がどこから照らすわけでもなく姿を現した。
尖った顎、地獄の様な赤い体に翼、細く長い指。

―やっぱり、あのランプは・・・

まさしく、ディアボロス！！
＞i３６０７６―４３１５＜

「ここはどこだ、出せ！」
焦りが見えだした二人に対し、スコールは落ち着いていた。
それは魔法のランプの存在を知っており半ば推測していたという余裕と、ここで焦っても何も変わらないという彼独特のメンタルが故のことである。
「それは無理な話だ・・・」
ディアボロスは低く嘲笑した。
「何故だ？」
言わば彼らはディアボロスにとって大事な獲物。

罠に掛った野兎が逃がせろと言うなど、まさに雲散霧消な話である。
ディアボロスは高笑いをすると、からかうように3人の周りを旋回している。
「何人目であろうか・・・・・・・・・ワレの家へと招かれし者は」
「決して、決して一人たりともおらんぞ。ワレに招かれた御客で帰った者など！！」
「！！」
ゼルは慄いて体を反らせた。
と同時にセルフィが躍り出ると、彼女のファイアが均衡を破った。
「だったら・・・・・・・・・・・・自力で帰るまでさ！」
炎はバリアのようなものに弾かれて焼き尽くすことなく終わったが、
ディアボロスをひるませるのには十分である。
ゼルは手首、足首、首のストレッチを開始し、スコールはガンブレードを引き抜いて迫っていった。
「小癪な！」
魔人は手にエナジーボールのような球を発生させると、それはものすごい速さでスコールへと投げつけた！
刹那。
スコールは先ほどのような圧力を体に感じたかと思うと、バブルに閉じ込められていた。
「スコール！」
彼からはゼルの口が必死に動いていることが見えたのだが、耳は全く機能していなかった。
それどころか外の世界がスローモーションであり、苦痛の時は始まった。

「どうするの～、スコール捕まっちゃったよ」
「わ、わかってるって！見るにあれは重力の膜みてぇだ・・・・・・
つまり」
「どういうこと？」
「・・・・・つまり、ディアボロス（アイツ）を倒さなきゃ助けられねェ」
そうも顔を背けているゼルに、ディアボロスは殴りかかっていった！
唸る剛腕、潰れるゼルの顔。
ディアボロスが繰り出したストレートは見事にゼルを捉え、ゼルは弾き飛ばされた。
にもかかわらず既に魔人の顔はセルフィを捉えている！
「なんて速さだい！」
セルフィはヌンチャクを交差させてブリザドの障壁を築き上げるが見事に一発で破られ、機転を利かせてまた結晶化させては破壊されの繰り返しがしばらく続いた。
その頃、ディアボロスの遥か頭上に漂うスコールは苦痛に顔を歪ませていた。
「どうやら・・・・・・・・・俺には
・・・・・・・・・苦手らしい」
体中を握りつぶされる感覚が襲う。
それは加減を知らない戯れる赤子のようであり、この世界の覇者の実力でもある。
そんな圧力を感じる中でも、スコールは冷静に思考を巡らせていた。
まずはディアボロスについて
第二に、この世界と膜の関係について
第三に、外の二人についてである。
（確かアイツは「ランプの魔人物語」のモデルのはずだ・・・・
全てを吸い込み街を消したとか・・・・
と、いうことはこの世界はランプの中・・・・・？

このむさくるしいやり方はヤツの特性・・・・・
押しつぶされる・・・・重い・・・・・・重力！？）
（ゼルなら詳しいだろうけどな、
アイツが気付くかどうか・・・・）
スコールの思考回路に不備はなかった。
ディアボロスは時空の住人である。
重力を操作し発生させることはもちろん、時間の進みをいじったりできるのだ。
しかし肝心のゼルはスコールの視点ではちょうど今、飛ばされたところだった。
「あぁ。長期戦になりそうだな・・・」
スコールが二人への期待と重力の圧力にに抗う事を諦めた頃、セルフィは孤軍奮闘していた。
「ちょっとは手加減しろー！」
彼女が懸命に手をかざすたびにヌンチャクの鎖が踊る。
「久しぶりの食事になりそうなのでな・・・・
おまえたちの命、いただこうぞ！」
ディアボロスは賢い。
パンチのような単純な歩兵攻めにはキリをつけると、ついにセルフィも重力球に閉じ込めんと試みた。
ディアボロスの周辺の光が手の辺りで歪曲していく！
「わわわ、ゼルは何やってんだい！
（ひそひそ・・・・・ここでもG・F使えるんやろか？）」
ディアボロスは彼女の魔法が届かない場所で勝ち誇ったかのようにホバリングをしている。
すでに隔離の準備は整ったようであり、ディアボロスは球を回しながらセルフィに問うた。
「愚かな人間よ・・・・」
セルフィはヌンチャクを突き出して目を閉じた。
（ぞなんやかこそ、ぞなんやかこそ・・・・）

ディアボロスは目下の少女が泣き叫ばないことに怪訝になりながらも、きっと諦めているのだろうと思うと支配感をくすぐられて気持ちが高ぶった。
「愚かな人間よ、慈悲を乞わないのか？」
「・・・。（ぞなんやかこそ、ぞなんやかこそ・・・・）」
セルフィは一切動じることなく集中を保っている。呼吸も落ち着き、一定のリズムではずむ髪は彼女のテンポと一致していた。
「ワレは残念だ・・・人間よ・・・・
もっと余興は楽しみたいというものであろう」
「そだな、でも楽しむのはどっちか？」
（ゼ、ゼル！帰って来てくれたんか～！）
いつのまにやらディアボロスの背後に仁王立ちしたゼルからは、拳で手の平をパンパン叩きながらも、
いつもとはどこか異なった余裕を感じられた。
「おまえは・・・・自分の立場が分かっているのか？」
「おまえ、俺に負けたらG・Fになれ！」
ディアボロスは嘲笑したつもりであったが、何より自分の質問の意図・意味を相手にはねつけられたことに憤慨した。
「何だ？愚かな人間よ！気でも狂ったか？」
「おまえ、俺に負けたら俺のG・Fにな・・・・」
「小癪な奴め・・・・・・・愚か者の愚かな方から葬ってやるわ！」
ディアボロスはゼルが全てを言い終えないうちに球をがっしりと掴むと、力いっぱいゼルの方へと放っていった。
「身の程を知れ！」
万事休す。
いや、身をわきまえるべきなのは魔人の方であった。
何故か球は放たれる前に力なく消え、初めて力が消えた感触にディアボロスは赤子のような表情になった。
「もらったぜ！（スキありぃ！）」

ゼルが瞬刻、ディアボロスの懐に入り込むと、そこからゼルの時間が始まった。
「おらおらおら！！」
ラッシュパンチとヘッドショックのコンボは彼の特殊な流れの一つである。
ジャブ、ストレート、ジャブ、ストレートが見事に決まっていく。
しかし彼はディアボロスを逃がすことはなく、右手で殴り倒した後はしっかりと頭をつかみ、その石頭で―。
ディアボロスはグウの音が出る間もなかった。
先ほどまでの身のこのなしもいず知らず、一度ゼルに懐をマークされると手も足も出ないのだ。
「そして、決め技だぜ！」
「ゼル、いけいけ～！」
「渾身のバーニングレイヴ！！」
ゼルはヘッドショックで魔人を叩きつけると、自らも振り上げた右手に魔力を込めつつ落下に任せて地面を殴り付けた！
ついに魔人は倒れた。

魔法のランプ（後書き）

後半から書き方を変えております。。

大陸横断列車

「人間どもよ・・・・・・・・・ワガ力を必要とする時には、ランプを用いるがよい・・・・・・スコールとか言ったな・・・・・・おまえは・・・あの男によく似ている・・・・・・・・・・・・・・・」

「てっめぇ～この野郎！」
駅のホームでも、まだゼルは怒りがおさまらなかった。
「・・・。（おまえのミスだろ）」
ゼルが狂人化している理由と言ったら単純だ。
今回もおいしいところをスコールに持っていかれた上に、ディアボロスが声をかけたのもゼルではないからである。

「なんてったっておこぼれちょうだいなんだからな！」
ゼルはベンチに片足を乗せて食ってかかった。
スコールもスコールで黙っているというのだから仕方がない。
「出て来なけりゃいいのによ！」
「鳥（チキン）は地割れにビビるというのか？」
「まぁまぁ、スコールもムキにならないでさぁ」
『セルフィには関係ない！』
セルフィもこれには声を上げずにはいられなくなった。
「なんやて？もう一度行ってみろや××▼ぞなんやかこそ！！
セイレーンさんと魔人の能力を取っ払ったのはウチなんやで！」
「ウチなしやったら、今頃囚われの身や！
ようそれを覚えとき！」
「・・・。」

しかしセルフィのトラビア弁には凄味がある。
お転婆な雰囲気からは想像ができないような口調のギャップは、アルケオダイノスよりもはるかに恐ろしい。
彼らが揉めているのには訳がある。
決してスコールはディアボロスのとどめを横取りしたわけではないのだが、今まで手も足も出していないスコールが一撃で決めたことにゼルは不満があるのだった。
順を追って説明しよう。
まずゼルがディアボロスの懐に入れるようになった理由。それはセルフィのセイレーンの力である。
ゼルが挑発して注意を反らしている間に、沈黙に徹していたしていたセルフィがセイレーンを発動して魔人の重力の力を取り除いたのだ。（この時スコールも解放された。）
そしてゼルが格闘技を繰り広げたまではいいのだが、最後の決め技でディアボロスを放した時に明らかな余裕を与えてしまった。
故にスコールが決めなければ倒せなかったという事だ。
というより実際はスコールへのパスでしかなかったのだ。
何故ならゼルが手塩に温めてきたバーニングレイヴは、魔力のパンチで地面を割くものなのだが、スコールが言ったように飛行できるディアボロスには事実効くことはなかった。
それでもって偶々スコールが捉われていた球の位置がディアボロスの真上だったために、解放された後に必然的な自由落下でも魔人を斬りつけることができたというわけである。
その一斬りが既にボロボロだったディアボロスの致命傷になり、魔人は彼らを解放したのだ。
この小競り合いは駅員が仲裁に入るまで終わることはなかった。
ＳｅｅＤ初任務、しかもまだ依頼人の元まで辿り着けていないという状況においてケンカとは、さすがのキスティスも頭を抱える事だろう。

『ティンバー行きの列車、まもなく発車しますよ・・・』

ガルバディア国ティンバー領、バラム大陸の唯一の陸路で行き来が可能な都市である。

この何両にも連なる列車は、すさまじいスピードで海を越えることができるため、観光客の足であった。

しかし最近は向こうからの利用客が少ないと駅員は肩を落としていた。

駅員に言わせればそういう時は決まって大陸であることが起きているという・・・

スコール達三人は、バラム港の象徴”青”一色の車体に乗車した。

まだ見ぬ世界への箱舟へと・・・

「この列車すごいね」

セルフィは乗り込むや否や窓に張り付いた。

まだ駅舎のホームしか見えないというのに、彼女は顔がほころばせる。

「さすが大陸横断鉄道だよな・・・・・ティンバーへ行くのだって、海底トンネルで海を越えちまう」

「すげえだろ・・・？」

物知りゼルは誇らしげに胸を叩くとスコールの顔を覗う。

切り替えが早いのか、無邪気なのか、既にゼルはランプ騒動が頭から飛んでいた。

「興味ないのね」

スコールが「そうだな」と無機質に応えるだけにとどまると、ゼルはがっくりと肩を落としてキャビンへと向かった。

セルフィの鼻歌だけが列車の騒音に対抗していた。

「きしゃ～♪きっしゃ～♪はっしれ～♪・・・・・・・・・・

ぼっくらをのせて～♪とおくへ～♪・・・・・・・・・・
ぼっくらをのせて～♪みらいへ～♪・・・・・・・・・・」

この大陸横断鉄道には、ＳｅｅＤ専用キャビンが存在する。
何故なら先述したようにガルバディア大陸との唯一の陸路だからだ。
ＳｅｅＤの任務は絶対的でなくてはならず、また情報の漏えいも避けなくてはならない。
故に、数日の時間を要する旅路において、一般客と触れあえる環境ではまずいのだ。

「うっひゃぁ～、すげぇ～！」
ゼルが興奮するのも無理はない。
学生寮の一室ほどあるかという広さのキャビンには、豪華絢爛なシャンデリア、落ち着きのある観葉植物が腰を据え、まるでセレブ御用達のホテルのような内装となっている。
大きな窓にはブラインドが下がっており、目を痛くする夕日を遮断していた。
「ペット通信の最新号！それに月刊武器４月号が置いてあるぜ！これだけ雑誌がありゃ飽きないわな」
ゼルはＬ字型の白いレザーのソファーにどかっと腰を下ろすと、背中をもたれて両手を広げた。
まるでサイファーのようである。

スコールも柔らかなソファーに腰をかけた時、シュッっという軽快な音と共に自動扉が開くと、千鳥足でセルフィがキャビンにもたれ込んだ。

「どうしたんだ？」

スコールは真っ先にディアボロスの影響を疑った。
セルフィの目は異常なほどにうつろで、立つこともやっとである。
「ううん。なんか、眠いの・・・・・」
眠気は彼女だけでなく、スコール、ゼルも少なからず感じていたことであった。
きっと疲れているのだろうと考えたスコールは、彼女に休むことを勧めた。
「まだ夕時だが、任務に差支える事はない」
「俺も・・・すっごく眠い・・・」
ゼルも立ちくらみを覚えたのか頭を押さえて苦しみ始めた。
「おい、どうしたんだ？」

しかし、やがてそれはスコールをも襲った。
強烈な耳鳴りと眠気。
ジェットコースターのピークから下る時のように、それは急激に強まった。

落ちる・・・落ちる・・・
彼らはその場に倒れた。
「催眠・・・・ガス・・・・か？」

ガルバディアの軍人

「ん？・・・・・ついてる？」

それは、セルフィが自分に持っていないものを感じたことから始まった。

一番最初に股下の違和感を覚える辺りはセルフィらしい挙動だが、3人が感じた”変化”はそれだけではなかった―。

今、スコールは不思議なものを見て、それを体感している。

目に入っている”ある人”のことが見えるのに、”その人”の感覚の一部を感じる事が出来る。

スコールはその現象に、バーチャルのような異次元の感覚としか折り合いのつけ方が分からなかった。

（そもそも、スコールはバーチャルなどという砂上の楼閣を信じるような男ではないが）

◇■◆■◇◇■◆■◇◇■◆■◇◇■◆■◇◇■◆■◇

三人のたくましい男は、平穏な森の中を必要以上に注意深く進んでいた。

あちこちに火柱が上がっていることは確かなのだが、それは燻っていると言った方が正しい。

どうやら先導しているのはラグナという人物のようだ。

何も気配がない、まるで白雪姫さえも出てこようかと言う森の中を彼は木陰で一旦停止、また停止を繰り返すように、後（のち）の二人を促しながら進んでいる。

それはある種のオーバーアクションとも覗えるものだ。

さすがにお供の二人は訝ったのか、細身の人物が彼を引きとめた。

「ほんとうにこっちかい？ラグナさんよ」

三人とも長身の屈強な体つきである。
全員１８０ｃｍを上回っているであろうか。次は中でも際立って大きく、横幅もある男が低い声で訊ねた。
「なあ、俺たち戦争に来たんだよな。ティンバー軍の屈強な戦士たちを相手に」
「それがなんでこんな動物達を相手にちまちまやらなきゃならない？」
長身の人物もさらに拍車をかける。
彼の頬には３本の平行な傷があった。
おそらくその”動物”とやらに引っかかれたのであろう。
三人は倒木でできた橋で小川を越え、山道をひた走っていた。

「ん～、それはあれだ・・・・・
ほら、あの、ね」
遂に先頭のラグナが立ち止まって振り返ると、頭を掻きながら苦笑いをした。
「また道間違えた？」
長身の人物が鋭く突っ込むと、ラグナは黒い長髪をなびかせて進行方向へと向きなおした。
「とにかく帰還だ。
デリングシティへＧＯ！」
腰に両手を当てて胸を張るラグナの姿は、ある種のオーラを感じさせた。

思えば三人ともユニークな装いをしている。
先頭のラグナは黒髪の長髪ではあるものの違和感を感じさせないし、寧ろ甘いマスクと見事にマッチしている。真ん中にいるキロスという人物は一人だけ黒い肌をしており、編んである襟足とカタールという両刃の二刀がなんともエキゾチックである。そして、捕鯨用に見かける背丈ほどの巨大なハープンを背負っているのは大柄な

ウォード。彼はがっしりとした骨格に頭に巻いたブルーのバンダナ、そして頬に走る古傷が特徴的である。
一人一人は歪だが、3人そろうと一体感があるのだからこれもまた面白い。
ラグナは少年の戦争ごっこでよくみられるようにマシンガンを構えながら走り、ウォードはの重たいお腹のバランスをとるためにふんぞり返りながらひぃひぃとついてゆく。
そしてキロスはいたってまともな挙動だ。おそらく彼が一番賢いのだろうか、一帯が安全であることを既に理解しているようで、それこそ”無駄”な動きが一切ない。
欠伸をするなど、ところどころに余裕さえも見せている。

「ラグナ君、何をそんなにキョロキョロしているのだい？」
キロスは見た目よりも落ち着いた口調で話す。
25歳のウォード、27歳のラグナと比較しても彼が一番の年下なのだが、何事にも物怖じしない点からしても貫録があった。
対してラグナは飛び出してきたフンゴオンゴにも驚くほどであって、そのキノコ頭に腰を抜かすほどでの調子だ。
ラグナはキノコが消えていった草むらに向かってマシンガンを数発撃ちこむと、頭を掻きながら立ちあがった。
「習わなかったか、後輩よ。戦場ではいつ敵が出てくるのか分からないんだぞ．．．．．
注意深く進まねば．．．．」
「ラグナ君．．．．」キロスは咳払いをしたラグナを見てカタールを納めると、右手で額の汗をぬぐいながらだるそうに言った。
「確かに君の言っていることは正しいが、あれを見てから言って欲しいな．．．．．」
キロスが見つめる先には、明らかに軍用車と思しきものが背中をパックリと開けていた。
四駆の上下開きの荷物室に負けないほどに口をあんぐりさせてい

るラグナに、口下手なウォードが助け船を出す。
「ここはティンバー遠征のための拠点・・・・・つまり戦場ではない」
どうやらラグナ三人衆は、”入り口に出た”ということのようである。
ラグナは再び照れくさそうに頭をむしゃむしゃ掻くと、稚児のように無邪気に軍用車に駆け込んだ。
スコールはハンドルの手触りを共に感じていた。もしかしたらガーデン車の方が心地いいかもしれない・・・。

むむむ・・・？
「どうした、ラグナ君」
キロスは、ハンドルを握ったままでアクセルを踏まないラグナの顔を覗った。
運転手（ドライバー）は額に汗を滲ませ、若干だが顔を歪ませている。
ラグナは言った。「別に、なんでもない・・・・」
キロスは顔色一つ変えずに前を向きなおすと、後部座席の狭さに喘ぐウォードの言葉を代弁した。
「早く行こうか、ラグナ君」

本当は・・・なんか変なんだよな。妙に力がみなぎっているし、頭の中がかゆいんだ。
ラグナはエンジンを一ふかしすると、アクセルを踏み込んだ。

スコールは空気が吸いたくてたまらなかった。
（かゆいといえば・・・）
（うるさいな、コイツの頭の中・・・）
スコールが感じるラグナの脳内はまるで朝の食堂のように混雑していた。これは効率的思考を持つスコールにとって、耐えがたいことである。

言葉に表すことができないストレスが、確かに彼を苦しめていた。
これはゼルやセルフィと付き合うよりも、いや、ディアボロスの時よりも避けたい事案だ。スコールはそう思っていた。
何故ならラグナという男の頭の中には、無駄なことばかりが詰まっているのだ。
これは行動からも分かったことであるが、軍人にして彼は知識が少ない。
その代わり、意志だの意思が溢れんばかりに乱雑しているのである。
スコールはラグナという男をサイファーやゼル以上の”動く感情”だと考えていた。
「早く抜け出したい」
「早く夢よ醒めてくれ」
スコールの頭の中には、もうそのような現実的な思考はなかった。
というよりも、既に諦めることを諦めており、ラグナという男に興味さえも抱いている。
スコールは自らに空想的なことが過(よぎ)るとは1ミリも抱いてはいなかったが、間違いなくラグナという男に親しみを覚えていた。
それはサイファー、ゼルに似ているからか？いや、それともただの夢の中の人物だからかは分からなかったが、（そのことについて考えようともしなかった）
この人物から離れられないことを受け入れたのだった。

自分が知らない場所を進むラグナ達、そしてそれを感じる事が出来る自分。
スコールがこの境遇をどこかしら認め始めていた頃、ラグナ達一行はフロントガラス越しに華やかな夜景を捉えていた。
小さな光の集合体は、やがて闇の境界を浮かび上がらせる。
傷一つ負わなかった戦士達を、街は今、迎え入れようとしている。

小高い丘を駆けおりながら、ラグナは言った。
「あと4，5分ってとこだな」
肩肘をついて目を閉じていたキロスはいつになく少し驚いたように飛び上がると、ニヒルな笑みを浮かべた。
「ラグナ君、君って男は帰るべき場所だけは迷わず辿り着くようだな」
「へへへ・・・」
素直なラグナは皮肉にも皮肉に気付く事はあるまい。
キロスはその眼中にデリングシティーのトレードマーク「凱旋門」を捉えると、後部座席のウォードを起こしにかかった。
「うるせえイビキだな、いい加減このイビキを何かに利用できねえものかね・・・」
キロスとウォードは硬直した。二人ともその言葉の意味について考えてみたが、答えが出る事はなかった。
おそらく、ラグナ本人も意味を咀嚼することはできないだろう・・・。

＞i359976｜4315＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3983y/

SUCCESSION　of　WITCHES LOVE　?〜迷えしフクロウ〜

2012年1月6日19時49分発行